

季刊 連句 第23号

昭和六十三年十二月一日発行



季刊連句 第23号 目次

北枝の墓（南柏雜記 21）	1
岩木の臭き宿（『春の日』）	佐藤 廣幸 2
「鳶の羽も」の巻 鑑賞（II）	東 明雅 4
第五回 武翁賞発表（昭和六十三年度）	9
「蓑虫」付勝練習二十韻	12

第八回 俳諧芭蕉忌	第二十七回 猫蓑会	14
正式俳諧興行	脇起り二十韻	葱白く 杉江 杉亭 捌
二十韻 六卷		
	捌 梅田 利子	小川 弥生 上月 淳子
	下坂 元子	下鉢 清子 八角 澄子
	文 福井 隆秀	瀧川 雅代 金久保淑子

句を付け合うという人間関係	矢崎 藍 20
—連句と人生の楽しい未来を信じて—	
ころも俳諧 歌仙 虚空	捌 矢崎 藍 22
連句法楽	福井 隆秀 23

おくのほそ道紀行 II	下鉢 清子 24
歌仙 二卷	捌 秋元 正江・式田 和子
膝送り 二十韻四卷	
新山中三吟 歌仙（秋元 正江・坂本 孝子・式田 和子）	
両吟 二十韻一卷（坂本 孝子・大窪 瑞枝）	

柏連句会 二十韻二卷	捌 東 明雅・五十嵐讓介 28
大和便り	佐藤 廣幸 29
雁帛往来	

北枝の墓

南 柏 雜 記 21

雅

一泊二日のあわただしい北陸路の旅、金沢では有名な願念寺の一笑の墓、成学寺の蕉翁墳、山中温泉では芭蕉が泊った泉屋の跡地、それから有名な那谷寺、さらに足をのびして斉藤実盛首洗いの池、全昌寺まで廻った。三百年前、翁がとぼとぼと辿った道がすっかり舗装され、その上をタクシー三台に分乗して行ったのだから、本当の翁の旅を味わうには遠いだろうが、それはやむを得ないところだ。

十月四日、午前十一時半金沢駅に着くと、「寒雷」の同人山本一糸さん、平本微笑子さん、才川道子さんがお出迎え下さって、御案内して下さったのは恐縮であった。

二台のマイクロバスで出発、やがて到着したのが、この山の上町の浄土宗寺院心蓮社であった。寺の後の墓地にすぐ北枝の墓がある。とむろ石（戸室石）で築いた大きな墓には「趙北枝先生」と刻まれ、享保三年二月十二日とその忌日が記されている。北枝は小松の生まれであるが、金沢に移住して、研刀を業とし、金沢蕉門の始祖となった人、「おくのほそ道」の旅の芭蕉を迎え、山中温泉に同行して翁の教を受け、有名な「山中三吟」を残した。

わが俳諧伊勢派は芭蕉から北枝―希因―關更―蒼虬―芹舎―凌冬―芦丈と流れて今日に及んでいる。いわば流派の始祖として平生も尊崇していたが、今、このように掃苔する事が出来て満足であった。

驚いたことには、伊勢派三代目の高桑關更の墓も、北枝の墓のそばにちゃんと残っていた。この墓は北枝のほど高くないが、「峨山軒孤月關更禪門」と彫った墓石の上には庇みたくない石が冠っており、これは格式ある町人でなければ許されぬものという話であった。

この心蓮社は金沢卯辰山の麓にある幽邃なお寺である。御住職の案内で座敷に上がり、お茶をいただいたが、座敷から見ると築山池泉式庭園は、なまじい人工を施してないために、すばらしい景観であった。さほど大きくない池を巡って、三百年以上経ったといわれるタブの木、つくばねがし、羅漢楨などが鬱葱と茂り、建物の軒にはしのぶ草が生い茂っていた。池畔の石には田螺が日向ぼっこをし、夏の頃は蛍が飛び交い、もりあおがえるが卵を産むそうである。私はしばらくこのような風景に接しなかった。五・六十年前、日本がまだ貧しく、そのかわり美しかったころの田園風景がタイムカプセルから取り出されたように、ここに残っているのには感動した。

岩木の臭き宿（『春の日』）

佐藤 廣 幸

三月十六日旦藁が田家に泊りて

蛙のみ聞いてゆゝしき寝覚かな

額にあたるはる雨のもり

蕨煮る岩木の臭き宿かりて

まじまじ人を見たる馬の子

立に乗る渡しの舟の月影に

蘆の穂をする傘の端

野水

旦藁

越人

荷兮

冬文

執筆

右は『春の日』の「蛙のみ」の巻の表六句である。この歌仙が巻かれた貞享三年の春は、芭蕉は江戸深川の芭蕉庵にいて、尾張で興行されたこの歌仙の席には出ていなかった。しかし貞享元年の『冬の日』の成功に気をよくした荷兮など、名古屋の連衆が、芭蕉の後見を得て編んだ『春の日』は『冬の日』の姉妹篇に当るので七部集の第二集となった。

この歌仙は野水の発句の詞書が記す通り、貞享三年の春、三月十六日、名古屋近郊の旦藁の別邸に連衆を招き、同夜そこに一同泊り込み、翌十七日に巻かれた一巻である。この歌仙が初折の裏六句目にかかるころ、夜も次第に更けて

きたので、その日はそこで打切り、裏の七句目以降は、十九日に席を改め、名古屋の荷兮宅で同じメンバーによって引継がれた。

発句は主賓の野水が詠んだ。旦藁の別邸は水田に囲まれた田園地帯の屋敷であったのだろう。連衆の休む枕許近くまで蛙の声がよく聞こえてきた。発句の「ゆゝしき」は素晴らしいの意で、旦藁別邸を讚めて詠んだ挨拶の句である。これに対して、亭主の旦藁は、春雨の雨漏りさえこんな陋屋によくぞお泊り頂いたと謙遜して客を迎えた歓迎の意をこめた脇の句で応じた。第三を受持った越人は想を改めて、人里離れた貧しい旅籠を点出し、その宿のさまを描いた。越人の付句は恐らく名古屋から遠くない山里での体験を基にした写実的な句であろうと思われる。というのは、名古屋近郊には、この句に描かれているような岩木を産出するところが珍らしくなく、名古屋に在住する人達には、この事実がよく知られていたものと思われるからである。岩木に関する認識は連衆にとつての共通認識であったと思われる。馬場錦江の『七部集通旨』（嘉永五年）には、この岩木についての詳細な記述があり、古註の中でも最も精

細な註釈となっている。

尾州名所図繪愛知郡岩作村の辺及び春日井郡水野山中の地下に是を産す。地に入る事五六間にして此物あり、其質石より柔かに土よりはかたく木に似て非なり。故に土俗岩木と称す。其色黒く日を経て乾く時は赤みあり。わたり五十間百間又は際限をしらざるもあり。長短に至りては更にはかりがたし。幹の中に花ひらきくるみのごとき実を結ぶ。民家は薪にかへ炊爨に供す。聊か臭気あれば府下には用ひずといえり。佗しき宿りの体二句の間に餘情懸かたし。又江州八幡辺湖中よりも出すよし近江輿地志に見えたり。此集尾州の巻なれば他に尋ねるに及ばざる歎。

実に詳しい註記である。私は戦後間もない昭和二十一年ごろの物資の極度に乏しいころ、ここに記されている愛知県春日井郡から遠くない、中央線沿線の岐阜県の瑞浪から奥に入った山村の、小さな泥炭を採掘していた鉱業所を訪ね、その採掘現場を具さに見学した経験があるので、右の錦江の活き活きした記述には特に注意を惹かれたのである。当時、敗戦により国土は想像を絶する荒廃ぶりであり、ちょっとした旅をするにも配給米や雑穀を手製の布袋に入れて携行した時代であった。勿論当時燃料も不足していたので、都会からの泥炭の需要もかなりあり、こうした状況の下に泥炭の鉱業所も稼動していたのである。そこででは露天掘に

よる採掘が行われていた。その泥炭の採掘現場には我々の背たけにもならない深さの凹みに炭層が走っていた。泥炭は樹木の樹皮や木の葉などが太古地下に埋没したところに土壌が積み重なり、その重みに圧縮されてできた炭層であるため、完全に炭化したものはなく、その一片を手にとってみると、表面には木理を残したのも見られ、木の実や枝、虫などいろいろな不純物が混じっていて、手で割ると扁平状に簡単にさける。右の『七部集通旨』の「其質石より柔かに、土よりはかたく、木に似て非なり」という記述にピッタリの形状であった。名古屋の連衆にはこの岩木の宿がよくわかっていたのである。「臭気あれば府下には用ひず」と錦江の註にもある通り、江戸時代でも異様な悪臭を放つところから都心では薪炭の代用として使用されなかつたのであろう。

暁台の『秘註俳諧七部集』には、「岩木ハ伊賀ニテ雲丹ト言物ト同ジ。諸國ニ多シ」と註する通り、芭蕉の故郷、伊賀でも産し、ウニと呼ばれ実用に供されていたことが、服部士芳の『横日記』の元禄元年の條で明らかである。

伊陽山家にうにといふ物有。つちのそこよりほり出て薪とす。石にもあらず木にもあらず、黒色にしてあしき香あり。そのかみ高梨や、是をかくなへて曰、本草に石炭と云物侍る。いかに云傳へてこのくのみ焼ならはしけん。いと珍し。

かに、ほへうにほる岡の梅の花 翁 此一紙、我草

庵に残る。

私もその泥炭の一片をとって火に投じてみた。煙を出し
くすぶり、豆炭のような臭いを出しいやな臭いは部
屋中に拡がる。これでは都会で薪炭の代りに使われない筈
である。戦後の燃料にも困った時代であつたればこそ代用
燃料として需要もあつたのである。越人の第三は、近くの
原野でつんできたわらびを煮て惣菜か、蕨汁をつくるのに、
岩木を燃料に使うといえ、山家の質素な生活が目に見え
てくる。雨漏りが額に当るといふ陋屋の前句の趣きから、
岩木を燃やし食事の支度をする山家の宿の様子を付けたの
である。荷兮の四句目は、前句の景にふさわしい、家近く
に放牧されている仔馬を描いた。その仔馬に近づくと「ま
じまじ」人の顔を見るといった、人なつっこさを描いて見
せた仲々おもしろい句である。荷兮にしては珍らしい写真

前号に鑑賞 I を書いたあと、矢島房利氏より、次のよう
な蕪村の句を教示された。

苦船を刷ひぬはるの雨(蕪村遺稿稿本)

右は碧梧桐「蕪村新十一部集」に収められている。これ
によると、「はるの雨が苦船を刷ひぬ」ということになり
「初時雨が鳶の羽も刷ひぬ」の意に、蕪村は解していたら

的な句である。五句目の冬文の付句は月夜の川の渡ししの景
に転じた付けである。渡し舟に、「たつて乗る」というの
が、山村の渡しの実態をよく把握している。六句目は雨降り
の景に転じて付けた。雨中を舟が蘆荻をわけて進むとき、
さしていた傘のはしに濡れた穂が触れて水滴を散らすさま
を付けた素直な句である。「する」はこするの意である。
越人の「岩木の臭き宿」から、敗戦直後の四十二年前の
苦しい時代を思い出し、その時訪ねた美濃の侘しい山村の
印象が実に生々しく記憶に蘇えり、この「蛙のみ」の歌仙
の表六句を自己の体験に重ね合わせて眺めてきたが、『冬
の日』の五歌仙とはだいぶ趣きが違う、地方の農山村の実
景がおだやかに描かれている感じがする。私には、「岩木
の臭き宿」からは、草深い美濃の山村の風土の匂いが今も
強く感じられてならない。

「鳶の羽も」の巻

鑑

賞(Ⅱ)

東

明雅

しいことが推察される。有力な証句である。

しかし、私は「統続芭蕉俳諧研究」で山田孝雄氏が言っ
ておられるように、「はつしぐれ」をあまり直接に「鳶」
の上にかけない方がよいと思う。「鳶の羽も刷ぬ」と「は
つしぐれ」との関係は、いわば前句と後句との関係として
解する方が、はっきりこの句が二章体となり、丈高くなる

のではないかと思うからである。

2

鶯の羽も刷ぬはつしぐれ

去来

一ふき風の木の葉しづまる

芭蕉

(冬。木の葉。人情無)

(現代語訳) 一陣の風に散り散りの木の葉もおさまって、鶯は初時雨に濡れた羽をかいつくろって、梢にとまっている(付心) 付心というのは、前句と付句との二つが、どのような関係で付けられているのだろうか、その点を探るところである。A句にB句を付けるという場合、どんなところが二つの句をつなぎ合わせるきずなになっているのか、それを知ることは、俳諧(連句)鑑賞の第一歩である。だから、これから、毎句ごとにまず、その句の付心について説明するつもりである。

この脇句は、発句に言い残した、あたりの景色を軽く付けたもので、このような付け方を会釈の付けと言ひ、また、其場の付けともいう。

(付味) 前句と付句とが、うまく付けられているかどうか、その判定が付味の吟味である。

この脇句は高井凡董(一七四一—一七八九)が、名著「付合てびき蔓」(天明六年、一七八六)に「ワキは、初時雨に一吹風と付て、榎木葉というが、鶯への結びにて、しづまるとせしが、かいつくらふといふにあはせて、一句の作也。」と言っている通り、

初しぐれ——刷ふ

一吹かぜ——木の葉——しづまる

このように両句の内容が対になっており、それぞれがよくつりあい、響き合っている。

賛川他石氏は、ひびきの付けであるとはっきり言明している(「連句私解」)し、樋口功氏は「其の景の脇なり。凄風枯條を吹いて、さっと一時雨過ぎし後の寒曠悲寥の天地。十四文字に活現し、口気霜を生ずるを覚ゆ。稀有の名脇句と謂ふべし」(「芭蕉の連句」とまで激賞している。(補説)服部土芳(一六五七—一七三〇)の「三冊子」(一七〇九ごろ成)に、この付合について、「木の葉の句は、発句の前をいふなり、脇に一嵐落葉を乱し、収りて後の鶯のけしきと見込みて、発句の前の事をいふなり」という説明がある。

このような関係を逆付と言って嫌うというが、発句と脇句とに表現された内容を、時間的関連で見た場合、他にもこのような例は多く、また、この句に限って言えば、一陣の風が時雨を伴って過ぎて行つたと、同時に解するのが自然であろう。

さらに細かなことを言えば、「一ふき風」という語についてであるが、これは一しきり吹く風、一陣の風として、「日本国語大辞典」(小学館)にも、この句を例にして出している。

昭和になって「統統芭蕉俳諧研究」あたりから、一ふきで切つた方がよいという意見が現われ、賛成者が多い。そ

の理由は必ずしも明確でないが

一ふき・風の・木の葉しづもる

と読めば、リズムに特別のものが感じられ意味も深みがあると思われるからであろう。

だが、先にあげた「付合てびき蔓」でも、几童は「一吹風」と読んでいるようだし、芭蕉がどう読んでいたかは分からない。

木の葉は初冬の季語、「増山之井」には「貞徳云、枝に有て散らぬ句体ならば雑なるべし」という注があるように散って行く状態をさす語である。その点、散って落ちていく状態をさす落葉とは区別して用いる。

3

一ふき風の木の葉しづまる

股引の朝からぬる、川こえて

(雑。人情目)

(現代語訳) 木の葉を吹きちらしていた風もおさまったが、この寒い朝、自分は股引をぬらして、川を徒わたりするのである。

(付心) 発句と脇とが、ともに人間の景情の全くない人情無の句であった。この句は、前句の景色から、小川を徒わたりする男の姿を出した。このように人情無(場の句)に、その場になかった人情の句を付けるのを、起情の付と

いう。
(付味) 前句を川辺の景と見て、その川を徒渉する人を

芭蕉
凡兆

付けたのであるが、前句にある冷気の気分が「朝からぬる」という、寒さを厭う情にひびいている。

(転じ) 俳諧(連句)は、前句に付くだけでなく、その一句前の句(打越)から、全く別のものに転じなくてはならぬ、A句にB句を付け、そのB句にC句を付けた時、Aが打越、Bが前句、Cが付句ということになるが、このBを挿むAとCとは、全く関係がなく、また、はっきり別のものでなければならぬ。これを転じと言う。転じは付けとともに俳諧(連句)一卷進行のメカニズムである。打越の発句は、初時雨と鳶の姿を出し、佗びと寂びの景を叙べているが、それに対し、この第三は朝の景に転じ股引を濡らして川を渡る旅人の景情を描いている。発句はまさに墨絵の世界であるが、第三は広重の浮世絵にも見られるように近世庶民の姿が写されている。ただし発句の鳶もこの第三の旅人も、何か濡れて冷たい気分と情景が続き、その点ではあまり転じていない。

(補説) 股引は今日、冬の季語となっているが、それは近代になってのことで、江戸時代は無季である。この股引は庶民なら誰でも用いたものであるから、その点だけから見れば、特に旅人としなくてもよいであろうが、これを農夫とすると、次の「たぬきを、どす篠張の弓」が農夫であるから、脇・第三・四句目と同じような景情が続くことになる。それを避けるには、ここを止むを得ない用事で川を渡らねばならぬ、冷たい水に濡れるのを嫌ふ気分が「朝から」という語にこめられている旅人と見るのがやはり最もよい

であろう。

第三は留め方に一定のきまりがあり、て留め、にて留め、らん留め、もなし留めなどが普通に用いられる。この句は、て留めが用いられている。

4

股引の朝からぬる、川こえて

たぬきを、どす篠張の弓

凡兆
史邦

(現代語訳) 朝から股引をぬらして川を渡り、狸なまこの獲物を見廻りに行く。

(付心) 前句の川を渡る人を農夫と見て、その人の用を付けた。このような付けを其人そのひとの付つという。

(付味) 狸は夜出て活動する。もし畏おそにかかっていたら、他人に見つけられぬ前にはやく処分しなければならぬ。だから、その見廻りに行く人は、川をわたって急ぐので、前句の景情とよく似あっている。また、股引という語は何かユーモラスな気分がある。その気分は狸というとばけた動物にも通うところがある。

(転じ) 打越の脇句が、寒々とした風の景であったのに対し、この句は同じく淋しい山里の景でありながら、狸をおどす人物の登場、また気分にも何かユーモラスなものが感じられ、よい転じになっている。

(補説) まず、狸は今日では冬の季語となっているが、江戸時代は無季として取扱われているのは、前句の「股引」

と同様である。

ところで、その狸をおどす張弓とはいかなるものであろうか。旧解の多くは、この張弓を単なる竹の弓、あるいは幸田露伴の言う「ぶっぱたき」の類と考えている。

篠しのの強きを地に生ひたるまゝ、撓たがめ伏せて弓の如くに張り、樹の枝えだ極たぎなんどもて土に縫ひつけ置き、すこしく之に觸ふれば、機はり発して俄然として觸れたるところのものを弾き撃つやうにするものを云へるなり。狸狐兔こねうさぎなんどの類、皆これをもて威おそし畏おそれしむべく(中略)、今の語にぶっぱたきと云。(幸田露伴・「評釈猿蓑」)

しかし、この露伴の説は不十分であり、この篠張の弓に、最も正しい解釈をしたのは、天野雨山氏で、その著「猿蓑連句評釈」に次のように教えている。

「好色一代男」巻四の三「夢の太刀風」に、最上もがの寒河江がえに世之介が一宿する条に、夜更よこけ主は古き葛籠くわらごを明けて、鳴子・張弓取り出だし、「近ちかの山陰に狸の限りもなく暴あれける、これを捕へて饗あにせまほし」と出て行く。

とある「張弓」は、「和漢三才図会」巻二十三魚獵、彈たの条に、

按アノ狐彈こたま作つく彈たま弓きう一用いちよう油熬あぶ煎せん置お機械きがい中則喜ちゆうそくき香栗終かうりしゆう係か彈たま(以下略)

右の文章によって、「篠張の弓」の正体ははじめて明らかにされたものと言ってよいであろう。

即ち、「篠張の弓」は篠竹で作って、狸を獲とるための彈たま

き弓を言うのである。「狸を獲る」と言わないで、「たぬきを、どす」と言ったのは、「是非獲るといふ程ではなく、懸っても懸らなくてもよく、威し半分に懸けて置くといふ意で使ったものと思はれる」と兩山は説明しているが、その点も賛成である。

四句目は軽く作るといのがならわしであるが、この句は景情ともに軽くて、申し分のない四句目ぶりである。

5

狸を、どす篠張の弓

まいら戸に蕙這かゝる宵の月

蕉 邦

(秋。月。人情無)

(現代語訳) この邸は荒れ果てて、藪陰には、狸をおどす篠張りの弓が仕かけてあり、まいら戸には軒の蕙が這いかかって、夕月に照らされて影をおとしている。

(付心) 前句の狸畏のしかけてある場所の様子を描写した句であるから、其場の付である。

さらに、歌仙の第五句目は月の定座と言って、一応こまでに月の句を詠むことになっている。ここはその定座通りに月を出した。月・星・雨・風・晴・曇など空にあるさまざまな現象をもって付けるのを「天相」の付と言う。

(付味) 荒れ果てた邸とそれを照らす月、そのすさまじさは、前句の狸の出る山里の荒涼さに、よく響き合っている。

(転じ) 打越の股引の句あたりからすこし庶民的に、俗

にくだけていた景情が、まいら戸によって品格のある境地に転じた。さらに、このまいら戸を出すことによって、発句からずっと家の外の景ばかりが続いていたのを、ともかくも家の内の景に転じ得たのである。

(補説) 「まいら戸」は、表面の左右の框の中に、横に棧をびっしり打ちつけ、多くはそれらを黒漆に塗った戸で、主として書院造りの玄関に用いるもの。寺とか邸宅など格式ある住居にあるもの。

「蕙這かゝる」は、廃屋の有様を述べたもので、実際に、まいら戸に蕙がまきついていると見るよりは、月に映る軒の蕙の影が、まいら戸まで及んでいると見る方が、空の宵の月影が一そう生きて感じが深まる。

「宵の月」普通の月でなく、わざわざ「宵の月」と指定したのは、宵の間の浪漫性を強調したものであり、「狸の妖魅気分には宵の月は動くまじ」(「芭蕉の連句」樋口功)とあるが、私はむしろ「艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづ思しいでおはするに、形もなく荒れたる家の、木立茂く森のやうなるを過ぎたまふ」(「源氏物語」蓬生の巻)などを面影(直接に故事をそのまま取らず、それとなく古典の情趣を感じさせるような手法)にしたものではないかと思う。この句は文高いととも、一種の花やかさがあり、いわゆる「猿蓑調」の代表的な句の一つであると思う。「朝からぬるゝ」と時分の打越であるが、異時分であるため許されよう。

第五回 武翁賞発表 (昭和六十三年度)

歌仙 荻の風

米谷 貞子 捌

賞状 副賞 金五万円

山口 みづゑ ・ 坂本 孝子
大窪 瑞枝 ・ 雑賀 遊

二十韻 該当作なし

選考委員

東 明雅
草間 時彦
杉内 徒司

武翁賞応募 作品一覽

歌仙 連衆

七 夏空 暗吾捌
翳雉・桃籬・惠洲・風人・信子
・蹴石・幸子・撫蘭亭

一行春 膝送り 和世・玲子・喜代子

八 風の道 千町捌
櫻晴・隆秀・正江・千恵子

二 卒業や 正雄捌 瑞枝・淳子・孝子・弘子

九 荻の風 貞子捌 みづゑ・孝子・瑞枝・遊

三 梅雨晴間 膝送り 淳子・みづゑ・正雄・遊・孝子
・弘子・瑞枝

二十韻 連衆

四 青齒朶 天留子捌 元子・麻子・淑子・隆秀

1 夏燕 膝送り 孝子・弘子・瑞枝・淳子・みづゑ
・正雄・遊

五 淡影 暗吾捌 惠洲・翳雉・信子・蹴石・風人
・幸子・撫蘭亭

2 鷗外の碑 千町捌 郁子・千雪・光子・讓介

六 濁江 翳雉捌 暗吾・信子・涕窺・風人・桃籬
・幸子・蹴石

3 せせらぎ 千町捌 庸子・讓介・惠美子
4 藤波 千町捌 みづゑ・好敏・栄子・一恵・天留子

選後に

草間時彦

猫糞会の人達、ことにご婦人方の技術水準が上ったことに瞠目した。よく勉強している。技術水準は上ったが、エネルギーを喪失しつつあるように感じたのは小生のひがめであろうか。又、付句が理から生れているような傾向がある。これも残念だ。

歌仙九編のうち「風の道」「荻の風」の二編が優れていると思った。「卒業や」も悪くないが、やや荒れている。「風の道」は樗晴、隆秀、正江、千恵子と第一級の作り手を揃えているにしては、作品に力がない。場の句というか、人情なしの句を多く用いているのは賛成だが、それらの句に切れ味がない。米谷さんの「荻の風」は一句一句に含まれている情報量が多過ぎるよう思うのだがどうだろうか。もう少し、言葉を惜んだ方が余情が生れると思う。「風の道」「荻の風」どちらが受賞しても違存はない。しかし、二作に賞を与える程ではないというのが、私の結論。

「淡影」「濁江」「夏空」は同じ顔ぶれで、新しい顔である。季の配列がおかしい。

その点を学び直せば、将来は期待出来る。

七人の膝送りの作があったが、大人数の膝送りはお祝儀としてはよいが、作を競うものではない。

二十韻には賞を与えるだけの作はなかった。

東明雅

歌仙「風の道」・「荻の風」、この二つの作品は、甲乙つけがたく、審査に当たって、最も苦心したところである。どちらも特別のキズはなく、相当の出来栄である。ただ、「風の道」が題材が豊富すぎて、全体にわたってキラキラして、かえって一巻のヤマ場と見る所がないのに対して、「荻の風」は裏の後半から名残の表まで、なだらかに展開して、転じ・付味よく、盛り上がりが見られるので、私は後者を推した。

二十韻「夏燕」二十韻で膝送りの七吟は無理であろう。後半が縞になっているのも全くそのせいである。

「鷗外の碑」・「せせらぎ」・「藤波」

右の三つの中で「せせらぎ」がよいという説もあったが、同一の揃きての作品が三つもならばと、その中から一つを選ぶのはかえって難しい。作者の熱心さがかえってマインナスに作用したようだ。結局、二十韻の

授賞は見送りとなって残念であった。

杉内徒司

二十韻の部。「夏燕」の大辞典、飛行船の二句とも迷詞を欠くため句意不明、編も一ヶ所あり、要するに指導者を欠く膝送り作品はダメである。連衆も精々五人までである。原田氏揃きの三作品からは「せせらぎ」を探る。これは五十嵐氏の句を多く採ったからであろう。

歌仙の部。「行春」同じ面に植物、衣服の同じ句材があるのが難。立句も審査の対象にしたいと思っているので「脇起」が不満。「卒業」付方に難ある個所目につく。

「梅雨晴間」膝送りの弊が出て起伏少いのがおしまれる。「青歯朶」桜井天留子氏ですでに受賞しているから埒外。「淡影」「濁江」「夏至」の三作品は式目に難があって採らなかつたが、この川崎の鹿吟舎はこの十三年月例会を守り、作品集三冊を上梓していると聞いた。今後の精進を祈る。「風の道」現代センスに溢れた作品、残す。「荻の風」意地悪い目でみても瑕瑾目につかず、可也。以上の理由で、十三作品から「せせらぎ」「風の道」「荻の風」が予選パス。そして最終結論は別項の如し。

蓑虫

付勝練習二十韻

東 明雅

投句締切

1月20日

四句目	飛ぶやうに行くホパークラフト	淳子	遊
五句目	心太芥子きかせてすすり込み	淳子	
六句目			
治定	制服ぬいだ彼とくつろぐ	よしえ	
1	桃割れ髪の娘十八	良子	
2	日傘の中で会釈するひと	美幸	遊
3	聖天様に日参をする	千雪	
4	鬼灯値切る市の雑沓	正雄	
5	何時もほほ笑みじっと待ちくれ	隆秀	
6	髪油匂はす浴衣着のひと	治子	
7	地図を広げて登山計画	淳子	
8	女神輿の声甲高く	あかり	
9	浮世絵めきしうなじたをやか	千町	
10	良縁ありと吉の御神籤	淳子	
11	籐枕してうたたねのひと	達子	
12	浅草六区拾ひたる恋	妙子	
13	引きしみくじの凶が気がかり	天留子	
14	夏帯似合ふ人の横顔	澄子	
15	歩荷になへる箱は四五段	啓世	
16	朝顔市のあの娘仕止めん		

※れもおもしろく、心太とよく位が合っているが「日参する」は「飛ぶやうに行く」と歩行体の打越である。4も鬼灯や雑沓など心太とよく付いているが、雑沓となるとその活気のある気分が打越の気分と通うのではあるまいか。5はほほえんでじっと待ってくれるのはやはり向付である。心太をすすりこむ男とそれを眺めて食べ終るのを待つ女性、まさに新派の人物を髣髴とさせる。6は其人の付だるうし、位もびったりだが、「髪油匂はす」がどうしても字余りになるのが惜しい。7はまた大きく転じている。この作者、自の句が多いことを苦にしておられるが、ここは自の句でもよいのである。高校の部室あたりの風景らしいが、それもおもしろい。8は心太とびったりの位である。ただ下七が2・5の形となっているのは、やはり気になるので、ひっくり返して、「甲高き声」と5・2にやられたらいかがか。それにしても、4と同じく、活気ある気分が打越になるようである。9もやはり向付と見るべきであるが、前句との付味にすこし問題がある。10ははつきり恋の句であり、神祇の句をも重ねており、位もよく合っている。11は付心がいまいである。「うたたねのひと」と前句とはどう結びつけるか。まさか、眠っている人の前で心太をすすりこむのか。あるいは心太をすすりこんだ拳句眠ったのか。どちらにしてもちょっと無理であろう。12はおもしろい。いかにも浅草に心太はびたりであろう。13はよく心を使った句である。恋と神祇を出し、しかもそのみくじを凶として、打越からの気分をがらりと変えている。

- 17 出會ひし農夫衾よけを提げ 杉亭
 18 ロケ現場まで衣裳そのまま 鋭太郎
 19 峠越ゆれば見ゆる三山 うせい
 20 箸の持ち方今も直らず 雅代

(応募受付順)

裏の二句目、ここは大体恋の句になっている。二十韻では裏と名残表と二箇所恋句を出すことになっているが、各六句ずつある中で、同じ場所には出さたくないし、さればとて、二つの恋句があまり接近して出るのもおもしろくない。それで裏の恋句はなるべく早く出し、それに対して名残の表の恋句はなるべくおそく出して調節するのが一般的な考えである。それが決まりきった形となるとまずいから、何とかそこに変化をつけて、たとえば裏に入ったらすぐ恋をはじめめる(待兼の恋という)か、あるいは三句目まで待つかである。また、思い切つて、五句目あたりから名残の表の折立か二句目まで、三・四句続けて恋の句を盛り上げ、そのかわり、その一巻の恋は一箇所にするとか、いろいろ変化のみちはあるけれども、やはり、裏の二句目で恋句に入るのが、最も普遍的であろう。

その点からみて、1の桃割れ髪は心太というやや古めかしい食物とよく位が合っているけれども、娘十八の妙齡にしては前句の「すすり込み」という勢いのある表現がややふさわしからぬ感じがする。2はおそらく向付であろう。これは一応恋の呼び出しでおもしろい。3は前句の人の其人の付けである。聖天様は男女和合の神であるから、こゝ

14はやはり向付であろうが、やや上品すぎるのではあるまいか。15と17はよく似ている。それぞれに変わった場面を描いておもしろい。しかし、前句の人を中において、打越にはホバークラフト。付句は歩荷乃至は衾よけの農夫と、珍しいものを眺めている感じが、すこしうるさい。これは打越は場の句とはいうものの、他の句らしいところが多分に感じられるからであろう。16もおもしろく、付味・位もよくできているが、気分の転じという点からはいかがであるうか。18はまた変わった句である。実におもしろく、付味は上々であるが、ロケ現場という語の気分がホバークラフトに近く、ことに片仮名の打越が気になる。19も付味としては上々であるが、三句の渡りをながめると、打越のホバークラフトを眺めて、付味では三山を眺めて心太を噓っている形となる。ことに打越の「行く」とこの付句の「越ゆ」は、ともに歩行体の打越であろう。20は前句に近い句であるが、軽く付けている点が打越のきらきらしたものから転じていてよい。

さて、治定した句も、さりげない句であるが、心太をすすりこむ彼をながめて、くつろいでいる女性の姿が偲ばれ落ちついたよい恋句である。また、第三から続いていた屋外の景を室内に入れることになり、打越からの気分と状景を一転することができている。

次は雑の長句。恋の句を続けること。打越が人情自の句、前句が自他半の句となるから、今度の付句は、人情無でもよいけれども、出来たら人情他の句か、あるいは自他半でお願いしたい。

第八回 俳諧芭蕉忌

第二十七回 猫蓑会

恒例の芭蕉忌を十月二十三日（水）、深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を厳肅な中に和氣藹々と興行した。その後、二十韻六巻を首尾した。

参加者 三十六名
第一部 正式俳諧興行

脇起り二十韻 葱白く

次第（下記）

役割（次頁下記）

第二部 二十韻 六巻

- (一) 小春日和 梅田 利子 捌
- (二) 紅葉散る 小川 弥生 捌
- (三) 鯨日和 上月 淳子 捌
- (四) 汐の香に 下坂 元子 捌
- (五) 芭蕉忌 下鉢 清子 捌
- (六) 柊 八角 澄子 捌

(一) 次第

- 一、席入り (知司の指図により座見・座配の役)
- 二、配硯 (重ね硯を配る)
- 三、供華 (花司)
- 四、執筆呼出 (宗匠)
- 五、文台捌 (執筆)
- 六、俳諧興行 (知司挨拶のあと連衆付句)
- 七、花前 (執筆)
- 八、献香 (香元・宗匠)
- 九、花の句披露 (宗匠・執筆)
- 一〇、端作り (執筆)
- 一一、吟声 (執筆)
- 一二、文台返し (執筆)
- 一三、挨拶 (知司)

葱白く

杉江杉亭 捌

葱白く洗ひ立てたる寒さかな
 冬構へする里の家々
 かしこまり手習ひの子等並びゐて
 スタンプペたと押さる郵便
 月澄める今宵つまびくバラライカ
 新酒を妻の盃に注ぐ
 秋袷半幅帯は貝の口
 小倉山より二尊院まで
 集合の時間にまたも間にあはず
 しゃっくりとめるまじなひは何
 瓢虫だましふはりと飛びたちし
 馬冷しゐる爺照らす月
 髪梳いて逢うてもみたき世之介に
 国際電話で送る睦言
 思ふまじ人の笑顔の又浮かび
 銀のメダルをとった体操
 病状は一進一退友見舞ふ
 雉の尾を曳き高き鳴き声
 神南備の千木勝男木に花吹雪
 春を惜しみて聞香の席

明 翁 和 子 淑 子 啓 世 隆 秀 弘 子 雅 代 弥 哲 生 清 子 みづゑ 千 町 淳 子 正 雄 良 子 よしえ 麻 子 杉 亭 執 筆

宗匠 脇宗匠 副宗匠 執筆 知司 副知司 座見 座配 花司 配硯 香元

(二)

役

割

杉江 杉亭 中川 中啓 中島 秋元 福井 福隆 市野 弘隆 矢野 房利 雑賀 房利 滝川 雅遊 金久保 田淑 式田 和子

小春日和 梅田利子 捌

紅葉散る 小川弥生 捌

鯨日和 上月淳子 捌

授かりし小春日和や翁堂

利子

八つ手咲き初む古池の句碑

郁子

ワープロをいよいよ買ってお茶の間に達

子

何より母の好きな餅菓子

徒司

女学生「つこの館」に魅せられて

千雪

抱いて抱かれて漸寒の道

郁

後朝の窓にはっきり望くだり

司

木の美しぐれの音かすかにも

雪

リクルート次第にはれる悪巧み

同

最終電車しまる鼻先

達

焼酎の酔は現か幻か

郁

床に置かれし水盤の月

雪

松蔭の刀善意の里帰り

郁

碧眼金髪匂ふ横顔

同

バス停に昨夜の芸者遠会釈

司

お三味の皮に化けた野良猫

利

群発の地震に耐えて荘暮し

同

友と行く畝傍香具山花霞

同

風船上がる空の無限狐

達

紅葉散る川の面鯉の見えかくれ

弥生

冬暖かき峡の山庵

正雄

ひもすがら永字八法ならひひて

房利

運動靴にお下りはなし

和子

十六夜の新幹線の窓明り

ふみ

秋を惜しむはひろし裕子か

雅代

悪妻のねごとをそめてぬくめ酒

み

当家貫はぬリクルート株

子

井戸端のなき世にはやる長電話

利

しびれきれても効く葉なき

代

帰省子を迎へて祖母の三回忌

雄

遠雷に早経の月

子

ナナハンをとばして東名道路行く

み

愛してるとよと口にする癖

雄

県立の高女生徒に四十年

利

掃除洗濯滞りがち

み

舶来のソファの上にベルシャ猫

代

蝶も蛙も浮かれ出る春

子

まつほどもなくて落花のひとしきり

雄

大川に潮上げ来るや鯨日和

淳子

後の月待つ若き脇板

良子

菊の鉢色とりどりに並べめて

哲

練習曲をポロポロと弾く

好敏

煙草つけ世間話のきりもなし

久美子

どの娘選ばう見合の写真

淑子

婚前の旅行今やおほっぴら

美

人生相談野暮な先生

哲

藪医者風邪腹痛を専門に

良

庭に囲ひし故里の葱

淑

酔のまはりて本音吐き出す

美

地蔵堂翡翠の数珠に月涼し

哲

浴衣の肩を抱きて口づけ

淑

四の五のと云はずきさつていて来い

良

こはごは乗りしジェットコースター

淳

カタコウム魚の印の刻まれて

良

渡る人なく霞む信号

美

真打の披露済ませて花万朶

哲

じゃれ来る猫にしはし惜春

敏

汐の香に 下坂元子 捌

芭蕉忌 下鉢清子 捌

柊 八角澄子 捌

汐の香に時雨忌の門くぐりけり 元子

はや都鳥群る大川 明雅

町内は機織る音の響きゐて 濱

ジグソーパズル十日がかりで 啓世

赤々と砂漠に上る月に会ひ よしえ

楼蘭の美女霧の酒場に 濱

草泊り話のあとに結ばれし 世

馬刺の味の尚残る舌 雅

タベルナを出て真直ぐにバルテノン 同

ブズキの調べきこえくる窓 世

夕すげのひらきそめたる野のはずれ え

蛇笏を仰ぐすてこの月 濱

明治大正昭和の御代を過ごし来て 雅

づきづきうづく片思ひする 世

湖衣姫の南野陽子はよいをんな え

かかとの尖の折れさうな靴 濱

エアロビクスレオタードなど取り揃へ 雅

蛇の唸りの夢かうつつか 子

根尾の花能郷白山みそなはず 世

かげろふ炎ゆる碑の詩 濱

芭蕉忌や上げ潮どきの小名木川 清子

障子にうつる庭の篠竹 遊

パイオリンとピアノ合はせる音のして麻 子

一客一亭服めるお抹茶 みづゑ

石山の石より白き月仰ぎ 杉亭

いぼじりと言ひ気絶する真似 正江

冷やかな頬に接唇をそとにする 彬風

振られた同士いつか恋仲 麻

曲馬団犬猫のほか鶏も 江

ドーピングにてメダル逃しぬ ゑ

伝言板丸っこい文字並べをり 遊

涼しい顔で出でし夕月 風

児の前で風船虫を掴まえる 亭

パパママごっこうそが本気に 摩

貞潔はもてぬ女のかくれみの 遊

超音波にて作る美酒 亭

消しゴムを使へば雲が消えてゆき 清

古里遠しと思ふ春愁 風

八重しだけこれに棲みし花の精 江

生絹をはりて扇干さるる ゑ

窓越に終句ふ座敷かな 澄子

集ひ寄りては口切の茶事 千町

敏腕の新聞記者と名を売りに 隆秀

今日もお休み明日もお休み 弘子

弦月の始発列車の尾燈消え 弘子

ぬくめ酒汲む若衆の宿 志げ子

べったらの市で袂に入れし文 秀

親も捨てたる身一つの恋 秀

カーレース瞬時に過ぎて豆となる 町

ちよっとうなされ声あげる犬 同

それぞれに思い出語る水水 秀

ピッケル突いて登る夏山 弘

高官も大臣も株へむらがりぬ 秀

誑し慣れたる青き剃りあと 弘

冬月を浴びてベージェの動かさる 秀

古き洋館ネヴァ河の岸 秀

彫り続けこのままいのち果つらんか 澄

老によき靴春をみめぐり 弘

花吹雪らくだのこぶをうづめたり 同

蝶を追ふ子の右へ左へ げ

初知司楽屋ばなし

福井隆秀

東先生より十月の芭蕉忌に知司をとのご依頼がありましたので、九月中旬、南柏光ヶ丘センターで他の皆さんとご一緒に稽古をつけて頂きました。

まず、第一が開会の挨拶。それから執筆の文台崩きがすんでからの第二グループ、そして第三が閉会の辞。この三つのヤマがあるのですが、第二、第三は別にどうってことはないのですが、開口一番のセリフが実は私にとっていささか厄介な言葉でした。只今より第八回俳諧芭蕉忌、正式俳諧を興行致します。

たったこれだけのセリフなのですが、正直いって言い難い。

音韻を辿ってみたら、ダイハチカイ、ハイカイ、バジヨウキ、シヨウシキ、ハイカイ、繰り返しが多いです。

いい難い早口言葉っていうのがあるでしょう。生麦生米生卵、隣の客は柿食う客か、東京特許許可局。この力行の繰り返し、早口でいうと舌を空転させるのです。

話は脱線しますが、私は三十年程前、劇団の演出部に居て、新人たちに発声練習を

教えていました。『この劇団は、木村功、岡田英次、加藤嘉、西村晃らのやかましい幹部がいて、なかなか厳しかった。当時私が教えた新入りの研究生のなかに白面十七歳の蛭川幸雄がいました。今日では世界的な演出家の彼ですが甚だ不器用でした。』そのとき教本として使ったのが、外郎売りの科白。

はじかみ盆まめ盆米ぼんごぼう。摘み蓼つみ豆つみ山椒、書写山の社僧正。ごめつなま嘸み、小米のこまがみこん小米のこなまがみ。縹子緋縹子ひじゅす縹子縹珍：。こんなセリフがえんえんと続くのです。役者は時によって早口でいわねばならぬ場面もあるので、新劇の連中にも基礎として教えていたものです。

要するに、ゆっくり言えば間違わないので、知司としては間を置いて落着いてやろうと思いました。

といっても、暗記しなきゃなりません。

道を歩いているも人気がないのを見すかし、声をあげて、只今より……とやっていましたが、まさかと思っていた遙か前方の婦人がこちらを何事かと振り向いたのには

驚きました。

それに、もう一つの難関は、羽織、袴。大正生れの戦前派なのに、本当のこといて穿いたことがないんです。歩けるかいなと不安でした。カミさんに着せて貰って、立ったり座ったり、やってみました。痩せてるので見場はよくないのですが、その代り上物が軽いので二時間くらい座っていたって平気の平左です。

さて、いよいよ当日、本番のときがやってきました。難関の第一グループをなんとか切り抜けた途端に、落とし穴がありました。宗匠、脇宗匠、副宗匠に声をかけ、東先生に入って頂くときでしたが、当日会場で、先生から、老長といいなさいと教わりました。長老ならいい易いのだが、うっかり老中とでもいおうものなら、東肥後守様お成りい、になってしまいます。

そんなこんなで、東マサアキ先生、こちらへとついでもってしまった。覆水盆に返らず。とんだ失礼をしてしまいました。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。不完全さを美と兼好も言っているのを言い訳に、薄水を踏む思いの初知司の役でした。

花司をお受けして

瀧川雅代

少しオーバーに言わせて頂くと、八月十五日を境に私の身边に一大変化が起りました。この夜突然の明雅先生のお電話で、芭蕉忌正式俳諧での花司のお役目をお受けする羽目となったのです。「ご心配ありません。皆さんが教えて下さいますよ。」先生の包み込むようなお声がつい御辞退の気持を麻痺させてしまった結果なのです。さて正気に戻ってみると呆然。私は女芸百般まるで駄目。お花活けられない、着物一人で着られない。で一週間もすると不安で頭が変になって来ました。安定剤を飲む位なら、と近所の生け花教室に通い出し、着物は兎に角慣れるしかありません。

当日は雲を踏み思いで広間中央に進みました。何とかこの分なら順調にゆくかと思つた矢先、石化柳の細枝の一本がくるりくると花瓶の中を逃げまわって、この俄か仕立ての花司を存分にからからてくれたのです。根締め菊を入れ、やっこの思いで献花をすませて座に戻りホッとすると同時に、世にも芽出度き「女人執筆」の誕生の間が参りました。執筆の凜たる举措、物腰高く澄んだ吟声、まことに新鮮にして優美極まりない芭蕉忌正式俳諧興行の絵巻が繰りひろげられたのです。花司と言う身に過ぎたお役目を何とか果たさせて頂き、目前に展開する歴史的とも言える新しい女性執筆による俳諧興行の席に連らせて頂けたことが、まるで夢の中の出来事のような思ひでした。それについても御心を配られ、いろいろと御指導下さいました明雅先生御夫妻はじめ皆さまの御温情に心から御礼を申し上げます。

配硯の役

金久保淑子

第八回俳諧芭蕉忌奉納正式俳諧興行は、十月十九日深川の芭蕉記念館で興行された。知司の力強い開会の挨拶につづき、配硯が行われる。

このお役を明雅先生より頂戴したのは八月半ば。初心者なので躊躇しながらお受けしたものの、元来気の短い性格の上、毎年九月十月はアレルギー症候群に悩まされ

て居り、当日症状がひどく欠席し皆様方に御迷惑をおかけしてはとそれが心を離れず大変不安でしたが、当日は寒さも定まった好天で、抗アレルギー剤の効めもよかったのか、清々しい気分で会場へむかいました。四段重ねの小さな木箱に納った硯の繊細さ、箔を散りばめた短冊、古人の風雅な遊びをしのばせる硯箱の一つ一つを改めて、出番を待つ。

久しぶりに着た紋付に身も心もひきまわり、重ね硯を宗匠、老師、連衆の方々へとお配りし席へ戻った途端、歩き方は、硯の扱いは等々非常に心配になり、ドツと汗の流れる思いがいたしました。

今迄一連衆としてボンヤリ拝見して居りました正式俳諧も、興行方の一員となりましたと、他の方々との動作の一つ一つにも気を配り、大変緊張した時間を持たた事を、仕合せに感じ、連句が楽しくなったこの時期の、すばらしい思い出となりました。

宗匠の花の句。そして揚句で作品が満尾し、文台返しにつづき又出番。足が痺れていないのを確認し、先にもましてと慎重に硯を重ねる。重ね硯の程よい重さを両手にホツとして、席に戻りました。

句を付け合うという人間関係

— 連句と人生の楽しい未来を信じて —

矢崎 藍

最終の新幹線に乗り東京から帰ってくる。人とたくさん逢った疲れ。しかも仕事はどうも自分に不満。神経が興奮して本も読めない。自分に「ばかばか」なんてつぶやいてしまう。さいわい声を出しても隣の座席に人はいない。ちよつと前まで元気なオネーサンで仕事してたつもりが、夜の窓ガラスには、やつれたオバサンが映っている。おや、斜めに雨がかすりはじめた。冷房が寒い。心細い。

氣ばらしに歌仙をはじめよう。でも雑巾をしぼったみたいな頭。発句に苦しんでいるときにふわりと一句が浮かびあがってきた。

— 梅雨寒や恥多き日のひとりごと

どこの俳人の句かというと、えー、わがころも俳諧の聖子さんの昔の句なんです。

ああ、これだこれだ！。苦しいときの共感はどうれしいものはない。

これに脇を付けようと思うと、もう心が軽くなっている。場がいいな。紫陽花がうなずくみたいに揺れているのはどうかな。いやいや、それでは今の気持ちの整理がたりない。

— 友ここにあり 揺るる紫陽花

聖子さんとはげましあつて、きゃっきゃつと笑ったような気分になっている。

この後こだま号は夜の雨をつきつけてさっそうと走り、半歌仙にたっしないうちにながらがるの三河安城駅に着いてしまった。

私にとっての連句の魅力は、基本的にはこういうごく私的な感情の流通にある。

もともと掛合い連歌の話が大好きなのだ。

あの江口の里でのにわか雨の話。道ばたの家の軒に身をよせた西行法師が、雨もりにあわて、板を抱えてかけまわっていた尼を見て

— 賤が伏家を葺きぞ煩ふ

— 聞いて、板を投げ捨てた尼。

— 月は漏れ 雨はとまれと思ふには

理屈ではない。やさしい感性がふたりの間に響きあっている。

人と人とは、男も女も、知るも知らぬも、かくむすびつきたいという気がする。

現代社会が機械的で人間関係が冷たくなったとは周知の

ことである。でも、だからといって顔をつきあわせ、プライベートな事情をぶちまけ、人生論を闘わせても、心が休まるかといえそうでもない。パフォーマンスのお祭り騒ぎで足りるというものでもない。

やはりもともになる個と個の關係に何かが求められてくる。そう思うとき、句を作り合ういわばデュエットの人間關係は類のない楽しさである。

そして、そのデュエットがつきつぎに展開して、想像の世界に飛んでゆく連句。捌きのタクトで作品にしあがってゆく連句は、現代社会にもっとも渴望される要素をふくんでいるような気がする。

それにしても学生時代に、堤精二先生の西鶴「自註独吟百韻」の演習を受けて以来二十年。東京を離れ豊田市にきて家庭をもち仕事に追われながら、なぜ連句という文学形態がほろびたのだろうと残念でたまらなかった。

これほどに自分がおもしろく思うものがなくなるということも不思議だった。(自分がおいしい食べ物はやっぱりほかにおいしいと思う人がいるはずである。私は平凡な自分のもつ普遍性を信じたのである)

仲間ができたのは、県立足助高校へ漢文の講師に行ったのが縁である。同じ国語科の先輩由川慶子先生に逢い、彼女の自宅での芭蕉を読む会がその気になってくれたのである。

暗中摸索の句作りに数年を費やして後、季刊「連句」創刊号を手にしたときの感激は忘れられない。明雅先生の「連句の復活とその将来」を、わくわくして読んだ。

そうして私たちは先生のご指導を得、猫蓑の先輩諸姉兄のしっばにぶらさがり、ころも俳諧として勉強を開始している。うれしい。

ただし句作りは当然ながら簡単ではない。関口芭蕉庵に時に勉強にうかがう私たちは先輩連衆の句の質と量とに圧倒される。

ことに女の自立なことがつねづね話題になる世代の私たちだから、さび、しをり、あはれという境地には遠い日々を送っておりどうも付け味が今一歩なのである。

しかし、継続のみを力として歩む私たちのとりえは、とにかく連句が好きなことだ。句を付けあうという人間關係が好きなことだ。

このごろよくハガキに五七五を書いてきた人に七七を付けて返す。逆もある。掛合い連歌みたいだと思う。いまにこういう遊びが流行するのじゃないか。シャレというのは子ども若い人も大好きなのだ。そういう大衆性があって、その頂点に連句作品が内容を競うときこそ連句の隆盛期だと思う。

ところで、へたっぴ句作りを元気でやってる私が心のささえにしているのは実は、俊頼髓脳にでてくる、良運の話である。

たしかあれは、中宮のお里帰りの御殿での秋のひと日。龍頭鷗首の舟に乗りこんだ公卿殿上人が岸べの良運法師に連歌をよませる。

——もみじ葉のこがれてみゆるみ舟かな

ところが、この句に付ける七七を舟のだれも思いつかずに苦しむのである。とりあえずぐるりと池をまわり時間をかせぐ。でも、だめ。もうひとまわり。

なやみつつ島をめぐる二そのの舟の姿を、私は寝つきが

歌仙虚空

矢崎 藍 捌

かなかなや棒の手一閃せし虚空

満月を切り山の稜線

厨裏青き林檎の荷を開けて

トランプ遊び声高くなり

砂まみれ汐の匂ひの夏帽子

はさみかざして脚長の蟹

入稿の分秒せまり案も尽き

奈落めいたるま昼間の夢

憂心のふりもかけひきDon Juan

つれこみ宿の外は本降り

多弁なる仕事いのちの女たち

テレフォンショップで神棚を買ふ

灯を消せばカーテン透かし冴ゆる月

いつか野性に帰りたる猫

どうどうと黄河濁りて漁父の小屋

辺境の地より届く絵葉書

陶壁の薄墨桜 花永遠とほに

句会に佳人装へる春

志津枝 藍 正 子 時 代 聖 子 治 子 都美子 藍 聖 代 聖 枝 正 聖 都 代 正 治

悪い晩に思い浮かべてはにこにこして、そして安らかに寝てしまう。

なにしろあの舟の連中はとうとういい句を付けられず、夕闇にまぎれて逃げてしまったのです。人生は楽しい！

いささかの小銭で買ひし蓬餅

事故の示談のこじれたるまま

病棟に放尿の音響かせて

梁にキの守宮はりつく

薪能次期家元の若きシテ

もったり熱き情婦の唇

化粧する胸の奥なるやじろべえ

遺言状で稼ぐ銀行

信号待ち学習塾をはしごの子

チーズケーキにトラジャコーヒー

名月を異国の夫つまの今は朝

酸漿市の雑踏をゆく

初鴨の渡りと聞けど沖の点

円空仏のまるやかな笑み

語るべき刻とき失ひつ老いの悔い

酒を漉へてぐい飲みの肌

幹叩き樹の精呼ばん花吹雪

ほらゆれてゐる白いぶらんこ

一九八八年八月二四日首尾 於 棒の手会館

聖 代 聖 藍 都 代 枝 治 枝 治 正 治 正 治 都 聖 枝 都 治

連句法楽

福井 隆秀

昨年の初め、米谷貞子さんがお病氣されて入院中との噂を耳にした。

私は同じ国分寺市在住のせいもあって、お住いには数度お邪魔したことがある。どこに入院されたのかご主人にお伺いして、早速お見舞いに参じた。

二月初旬の寒い日であったが、貞子さんは思ったよりお元気で、こんな大きな胆石が出たのよ、宝石だったら価値あったんだけど、と持前の屈託なさで、朗らかに笑われた。暫らくおしゃべりしてお暇するとき、決まり文句の、お大事にの一言だけでは余り芸がないと考えて、手持ちのメモに、

本復の日を祈りを梅真白

と、走り書きして辞去したのだった。

そうしたら、四日程して、病室の頭からっぱのなか、やさしい香りで満たしていただきお礼申しあげます。との礼状とともに、脇の句を四句、付けてこられた。そこで期せずして文音二十韻が始まった。続いて第二巻の夏の巻も巻くことになった。

思えば、連句という技術を曲りなりにも

身につけていたおかげで、そしてお互いレバシーを発し得る発信機、受信機を持っていた機縁で、数カ月の間愉しませていただいたのは、まさに連句冥利に尽きるところだ。

梅真白

本復の日を祈りを梅真白 隆秀

春シヨール編む屋のつれづれ 貞子

凍ゆるみ陶工の壺仕上りて

下駄をくはへて逃げの野良犬

洗ひ髪梳きつつあれば登る月

藍地浴衣に胸をくつるげ

亭主初心姉さん女房もどかしく

まかせておくれ修士論文

残れるは礎石ばかりの国分寺

マンモス団地あかりつきそめ

酔海鼠に機嫌なほして独り酒

福は内とて父のおどける 子

片ゑくぼ艶に老妓の恋がたり

逝きけるひとに怨み葛の葉

ひっそりと月の扉の錠とぎす

ほがらほがらと響く雁が音

またしてもダメを出されしテレビロケ

一服の茶で蕨餅食ふ

飛鳥山風の描きし花まんじ

雨もあがりて立ちし初虹

懸 葵

検非違使の剃りあとあをき懸葵 貞子

腕白肩に風薫る中 隆秀

吊橋に鈴音たかく響きあて

詩人氣どりで手帖など出し

一目見しひとの眉引き三日の月

そぞろ寒さにいつか寄添ふ

お囃子に地芝居はつる頃ならん

数珠もみしだき誂経ひたすら

はったりの陰で氣くばり金くばり

胡散臭きは政治家の常

飲みたくて女どうしの縄暖簾

終バスとなる木枯の町

マスクして利鎌の如き月仰ぐ

じれったいのも身から出た錆

叶ふなら恋句詠みあふ夫が欲し

魔性の猫のついと横ぎる

カーストも混沌としてカルカッタ

スパイス量る巷の陽炎

はらはらと散る花びらを掌に

母屋の簷より巢立ちゆく鳥

昭和六十二年十月十三日 首 米谷貞子

七月二十日 尾 福井隆秀

おくのほそ道紀行 Ⅱ

加賀路

下鉢 清子

「卯の花山・くりからが谷をこえて、金沢は七月中の五日也。」「おくのほそ道」の右の項に依ると、芭蕉が加賀金沢に到着したのは陰曆七月十五日、陽曆では八月二十九日という計算、まだ暑さ厳しい頃である。加賀には芭蕉の門人も多く、山中温泉を経て敦賀に着くまでに、この界限で約一ヶ月草鞋を脱いでいる。この芭蕉の跡を踏まんものと、一泊二日の旅となった。泣き癖の今年の秋も十月四日の空は晴れ渡り、一行十四名が上野七時二十分発の新幹線で出発すると、早速送送り二十韻も同時発車、その上に発句はつぎつぎと四句が行き交う。長岡駅で北越号に乗り換える。刈田の中に稽した緑の田も点在するを右に左に、ときには車窓に迫る柞の薄黄葉に目をやりつつ、付け句昼食の慌しさも、手だれの連衆なれば終着駅金沢に降り立つまでに四巻、満尾駅前よりタクシーに分乗、「あかあかと日

は難面もあきの風」も爽やかに、先ずは卯辰山下の心蓮社、「八方自他伝」「山中問答」を書き遺した立花北枝の墓に頷く。戸室石の墓碑銘は趙北枝先生、左斜前に關更の墓もあり、姥百合の大きな実は巧まぬ供華の様相を呈し、樹間より小雀の囀りしきり。

塚も動け我泣声は秋の風 芭蕉

の、小杉一笑の墓は願念寺にあり、人蔘木の下に苔むしていた。塀際の大きな榎櫃の実を挿頭に、しゃくれ気味の碑は一笑塚、心から雪うつくしや西の雲

と、辞世の句が刻まれている。金沢は古

刹の多くまた句碑の多い静かな町であった。

いよいよ一日のスケジュールの締め括り、

「燕歌仙」の地山中温泉である。加賀温泉

駅を出ると夥しい秋燕の群舞に迎えられた。

山中温泉は一名白鷺の湯、大聖寺川に沿い

鶴仙峽を望む絶景の宿で、所用で遅れて着

かれた式田和子氏を迎え、歌仙二巻の満尾

をみた。「山中三吟」に因んで「女流三吟」

も生まれた由、その頃は不肖の私は夢の中。

翌五日は芭蕉堂の建つ黒谷、蟋蟀橋（古

名行路危橋）を瞥見して、皮切りは医王寺。

滝不動を背後に着虬の碑が建つ。

なでしこの花や秋しる湯の香り 蒼虬

目を転じると滝口近く大文字草の純白の花一叢、深み行く秋の風よりも白しと思う。

北陸の名刹那谷寺は、鞍掛山の麓にあって、白い岩山を背に建つ堂塔。楓と椿の植え込みのコントラストの中、石畳を行くと岩窟内の本殿や三重の塔、四方の扉をはじめ壁面の唐獅子の彫刻も寂々と身に入みる。

石山の石より白し秋の風 芭蕉

雪化粧の頃再び訪れたいとの遊心はしきりに、ゆっくりと水の声風のこえを聞く。この旅で最も拾い物をしたと思われるのは、時間の差し繰りの良さから、計画外

の全昌寺に詣でたことである。曾良が病の為

に芭蕉と別れ伊勢に発ち、独り宿泊した折、

終夜秋風聞くやうらの山 曾良

と、残した地、芭蕉も遅れて訪れ

庭掃いて出ばや寺に散る柳 芭蕉

二基の碑は寄り添うごとく柳の木の下に

建っていた。寺内では杉風の刻んだ芭蕉の

木像、蒼虬筆の軸も拝見することができた。

大層親切であったタクシーの運転手の

「ほったらがーの人達の話は」

などと呆れられたが、ほったらがーを風

流人、自由人などと自解してみた。首洗沼、

民芸場等は、夫々の胸にありと思いつつ。

膝送り二十韻四卷

ちちろ鳴く

喉走る酒が命やちちろ鳴く
残菊匂ふ大床に月
清秋のリアス海岸波寄せて
足じゃんけんで跳ねる子供等
野良猫に餌を配るも慣ひなり
モラトリアムで彼女次々
挙式せぬわけも勝手な新人類
箒目揃ふ産土の庭
蜻蛉の今生れたり羽光る
ひれ振り交はすソウル閉幕
ハロセロナ目指し若者奮起せよ
三文文士の借財の文
胡弓の音響く裏町月凍つる
雪女めく人に魅せられ
行きずりに片手拝みの道祖神
かもめ舞ふなり海沿ひの径
まんぼつを食べに「あずさ」に乗り合はせ清
故郷近くゆるむまなざし
円筒の埴輪に花の降りこみぬ
曲水の宴今やたけなほ

明雅
あかり
千町
啓世
正江
孝子
瑞枝
淳子
麻子
よしえ
杉亭
清子
郁子
雅亭
淳子
孝子
清子
世

秋の風

訪ね行く加賀路の旅や秋の風
立ち待ち月にしるき嶺々
落栗を籠一杯に拾ひ来て
香りたのしみそそぐコーヒー
あの男何で喰つてる独り者
甘ったれるも計算のうち
金比羅の石の階杖曳かん
ちらりはらりと雪の降り来る
大寒の居酒屋赤鬼たむろして
取立きびしはじくそろばん
ドーピングうまく逃れて銅メダル
チマとチョゴリの練絹の艶
人知れず寄する思ひの募り来る
髪を洗ひて拭ふ柔肌
月涼し真間の手児奈の水鏡
砂の時計は砂をこぼして
青い鳥窓辺に飼ひて老いにけり
お玉杓子と泊る外孫
トラックの荷台に花の散りやまず
春の愁ひに閉ざすアルバム

明雅
清子
杉亭
よしえ
麻子
淳子
正江
千町
啓世
あかり
孝子
瑞枝
郁子
雅亭
麻子
枝
江

十三夜

馬の吐く大きな息や十三夜
屋根をころげる落栗の音
秋気澄む組紐捌く手の馴れて
吾子の帰れば仲の出迎へ
敦盛草大きく咲きぬ洞昌院
果樹一村は冷害に泣く
ちよつと見えてそれ者上りのあつかまし
強く締めたき夫のネクタイ
瑤瑤鍋火癖もうまく使ひ込み
五輪終つて渡る海峡
殉教の聖人の列ブロンズに
マントルピースはほんのかざりて
待望の二世帯住宅冬の月
孫といっしょにつける口紅
ルイ・ピトンバッグを買って島娘
電気なまずに触れてしびれる
占師げい竹鳴らす生業にて
朝のホームに揃ふ顔ぶれ
花ぐもり平家納経花散らん
笄簾葉のひびくのどけき

清子
明雅
郁子
淳子
麻子
よしえ
正江
あかり
孝子
瑞枝
千町
啓世
杉亭
麻子
清子
淳子
江

昭和六十三年十月四日
上越新幹線 車中

二十韻 両吟 秋驟雨

柳散るの句碑も濡るるや秋驟雨

墨磨り初むる十六夜の客

茸めし新居の厨たのしくて

ソファに寝をべる毛の長き猫

ヨーロッパ旅の土産の靴バッグ

ばばぬき遊び取りつ取られつ

ひそやかに逢はねばならぬとしよ

家裁調停三年をこえ

虎落笛鉛の海は巖を嘔み

鱈の指値は厚司袖下

教会の婦人部バザー賑ひぬ

お喋りの口ふさぐ鉛玉

道楽の果て坐る番台

夏足袋を脱がせば白き月の下

桜桃忌には似合ふシャンパン

蝶に触れぬこの頃の子等

山姥にすれ違ひたる花の蔭

鳩を眠らせ暮れのこる杜

昭和六十三年十月五日

於 山中温泉旅行 帰路車中首尾

坂本孝子・大窪瑞枝

柏連句会

二十韻二卷

昭和六十三年九月十一日
於・南柏 光ヶ丘近隣センター

西鶴忌 東 明雅 捌

西鶴忌昨日と過ぎし空の色

立待月にしるき線

ひよんの実を鳴らして遊ぶ子らの居て秋

ぴりりと舌に辛き煎餅

土用鰻土用鯰も水槽に

男と女恋に年なし

高級マンション痛風の犬

熱海まで「踊り子三号」一時間

前借寸借筆債の積む

やけに飲む火酒をのぞく月寒し

イコンのマリア壁の御燭

気が付けば親離れせし子の科白

四角五角の仲は序の口

艶事師和事師粋で薄情で

屋根に並んだ鳩の囁き

生涯の吉凶どうやらつり合ひぬ

嬰を抱きてうらなる昼

花吹雪妖しき夢の山越ゆる

紋白蝶のもつれ飛びゆく

千町

清子

景

八重子

明雅

八

清

景

町

景

町

清

同

町

八

町

清

景

山法師の実 五十嵐讓介 捌

ふふみたる山法師の実の甘さかな

フルートの音の響く待宵

家中に秋刀魚の煙立ち込めて

石蹴とばして子等の門限

息切れす胸突坂の奥の院

南蛮渡来のビールケース出し

朝シャンにマニキュア念入り女校生

湯ざましと煎茶々碗に茶托添へ

爺婆だけのならい吹く過疎

つかづかしてテレビカメラにディレクター

メスが入るか政治献金

楼蘭の旅に誘へり夢秘めて

夜のお酒は口移しする

惜し気なく羅脱ぎて月を浴ぶ

蠍蛾みたる城跡の濠

百歳を超え現役の医師の技

春風に梳く馬のたてがみ

連絡船乗りて尋ぬる島の花

飼鷺のこゑのなめらか

正江

郁子

庸子

千雪

庸

江

介

庸

江

雪

江

郁

同

江

江

郁

庸

雪

大和だより

佐藤廣幸

先きの『冬の日』の「まゆかき」(本誌二
号)の余滴を、ここにお届けいたします。

▽ 昔、成人式に際し、男女とも、仮親
を迎え、擬制的親子関係を結ぶ習俗が各地
で行われていました。そのうち女子には、
鉄漿付親・筆親と称する仮親がありました
が、筆親は眉かきのとときの仮親の称ではな
いかと思います。

▽ 『冬の日』の「まゆかき」の有力な
民俗資料を偶然見つけました。奈良市の県
立図書館、郷土資料室で『下北山村史』(昭
和四十八年刊)を調べていると、同地方で
は、「オカネはオトコの印、マヒゲおろす
は子の印」という口碑がのこっているとい
う。つまり、昔、娘が嫁に行く時(オトコ
が決まった時)には、もう歯を黒く染め、
その娘が妊娠すると、マヒゲ(眉毛)を剃
落した。それを言ったものだそうです。

▽ 七部集の『炭俵』の「振売の巻」に
は「又沙汰なしにむすめ産」という野坡の

連句会案内

従来通りです

付句があり、「産」にヨロコブと読ませる
振仮名が付けてあります。この元禄時代使
われていた同じ言葉が、大和の、それも吉
野の山奥の上北山村で近いころまで使われ
ていたということが、『東ノ川』(昭和三十
七年刊、上北山文化叢書(1))に、上北山
村ではお産のことをヨロコビと言っていた
と記されていきました。

▽ 古俳諧が日本の民俗と深いかかわり
を持つていることを、ここでも強く感じま
した。

雁帛往来

▽このたび、連句懇話会が発展的解消を
して、連句協会となった。このことについ
て、松山の鈴木春山洞氏から左の文章を送
られたので、御紹介する。

「今回、連句懇話会を連句協会と改名改
組した所以は、連句の限らない発展を期し、
社団法人化に備え、連句を我が国民社会の
中により汎く深く理解・定着させるため
である。折しも文部省主催国民文化祭は、日
本文化の、連句を含む伝統的なものを見直
し、その継承と創造・振興を旨とし各県を
発表の場として開催されている。本協会は
国民文化祭に対応して今後その継続事業に

なることを希い、埼玉では協賛大会を開催
し、愛媛では新規事業となり、千葉でも参
加実現を強力推進中です。」
鈴木氏は愛媛県ではじめて連句を国民文
化祭の行事の一つに新規採択させた功労者
である。我々はこの鈴木氏の努力を無にし
ないよう、新しく発足した協会を中心に懸
命の努力をすべきだと思ふ。

季刊「連句」 第二十三号

昭和六十三年十二月一日発行

編集人 東 明 雅

発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二一 東方

電話 〇四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七二五二二三三

印刷所 ()岩田印刷所

▽277 柏市豊住一ノ一ノ二一

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共

一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

再版
B6判
三五二頁
三五〇〇円
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かした句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をストック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 六六二円

国語慣用句辞典 B6 二二〇円

国語史辞典 B6 三三〇円

日本語源辞典 B6 一八〇〇円

京都語辞典 B6 一〇〇〇円

擬音語擬態語辞典 B6 三三〇円

隠語辞典 B6 三三〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B6 二二〇〇円

新語俗語辞典 B6 三三〇円

難訓辞典 B6 三三〇円

名乗辞典 B6 二二〇〇円

名数詞辞典 B6 四四〇円

あいさつ語辞典 B6 一八〇〇円

新版 こぼ遊び辞典 B6 五八〇〇円

類語辞典 B6 二八〇〇円

類義語辞典 B6 三三〇円

表現類語辞典 B6 四四〇円

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2